

【第1分科会】

《山梨》

記録者：加藤凜(南西保育園)

天野未希(いづみ幼稚園)

■提案①(0~2歳)

「出会い・関わり」を楽しむ造形あそび
～感覚遊びを通じた感性の芽生えを育む～
南西保育園 山田由美子・河西藍

■協議の内容

<0歳児>感覚刺激や感知する力が育つ中、色々な色や感触・不規則な動きのあるあそびを経験し、興味を広げたり感覚の働きを刺激したりしている。

<1歳児>指先の運動機能の発達も著しくなり、感覚刺激や感知に加え、触れた物の形や硬さを自覚するなど、過去の経験などと照らし合わせて感じ取ることができる。感知したものの感触をより楽しみ、他人とのコミュニケーションを広げていく中で、感知する意識を促す働きかけを行い、興味関心の幅を広げていけるよう関わっている。

<2歳児>自分の中の知識と照らし合わせ、触れたものを判断・認識する認知面の発達が目覚ましい。運動機能や言語など飛躍的に発達する過程を踏まえて、より興味を抱いたものに対して具体的に認知できるような働きかけや、友達との関わりの中で認知を共有していくことを促している。

センサーグッズを用いて、0歳児から2歳児の感性の育ちと保育者の関わり方や環境設定による子どもの動きの違いを観察した。そこから、未満児クラスでの様々なあそびや活動の連続性が、以上児クラス以降の科学遊びや自然への好奇心、音楽や造形などの表現活動に向けて主体的に活動する姿に繋がる「遊びの礎」となっていると再確認することができた。

■提案②(3歳児・5歳児)

表現するっておもしろい！

～子どもの心に寄り添い、共に感じる造形あそび～
岩崎保育園 深堀香・日原愛咲美

■協議の内容

園で見られるあそびを振り返ると、道具の有り無し・屋外室内関係なく、造形あそびが常に行われていることに改めて気付くことが出来た。大人が関わりすぎるとこのようなあそびが壊れてしまうことがあるため、大人は時には見守り、子どもが“やりたいことをしっかりとやらせてもらえる”と思える人的環境作りを意識して子どもたちと日々関わっている。

事例1：恐竜作り(3歳児)について

造形が表現のみに止まらず、子どもの身体的な活動・言語的なやり取り・社会的関係の構築・感性や思考の進化など、五領域全てに波及する総合的な学びのプロセスとして機能していることが明確になった。自分で考える・他者と話し合う・協力する・想像するという一連の活動が自然と展開されており、自己表現を通じて子どもの主体性が引き出されていることが観察された。

事例2：赤・青・黄色のうち、どの色が大事?(5歳児)について

混色あそびなどの繰り返しの経験を通して、子どもたちは自らの感覚と記憶に基づいて想像を膨らませ、道具が無くても豊かなイメージを再現する力を身につけていた。これは保育者が正解や結果を求めず、子どもの発想や感じ方に共感し認めてきた関りの積み重ねによるものではないかと考えられる。このような環境の中で子どもは“自分の思いや考えを受け入れてもらえた”という体験から、自己肯定感を育み他者の意見や表現をも受容する柔軟性を発揮していたのではないかと考えられる。

■提案③(3歳児・5歳児)

探究の過程としての造形あそび
いづみ幼稚園 岩田乃江留

■協議の内容

幼稚園は子どもたちが身の回りの世界に関わりながら試行錯誤を楽しむ場所であると考え、この過程を<探究>と呼び、子どもたちが探究を楽しめる保育へとシフトしていった。造形あそびも“やって終わり”ではなく次へと繋がる学びとしている。

事例1：広がる探究(5歳児)

これまでの遊びの経験が次のやってみたいことへと繋がっていた。雨水をろ過する活動では、素材を選び・組み合わせ・試行錯誤をしながら、自分にとって意味のあるものにしていくという点で、ろ過装置作りも科学あそびでありながら造形あそびでもあると感じた。また、日常的に行っている<こどもかいぎ>を通し、どんな考えも受け入れられる安心感の中で“人と違っても良い・自分の考えを持って良い”と感じられるようになり、考えることを楽しんでいる。こどもかいぎには<内的試行錯誤>、造形あそびには<外的試行錯誤・内的試行錯誤>があり、「面白い」「なんでだろう」「やってみたい」という子どもの内側から湧き上がる思いが、こうした試行錯誤の原動力になる。身体・感情・思考そして人や環境との繋がり、それら全てが動く時に世界と繋がる生きた探究となる。

事例2：探究の萌芽(3歳児)

環境や人との出会いが、子どもの「やってみたい」を生み出す。また、時間的余裕・心理的な安全性・信頼して見守る教師の存在・モデルとなる行動・教師の人数のゆとり・子どもたちの感覚に働きかける素材や道具が重要。この活動では特に満3歳児・年少児が夢中になって遊んでいた。

教師主導の保育から、子どもの発想が起点となり展開していく保育へと変化していき、子ども自ら「感じ・考え・試みる」姿が見られるようになった。そこには保育者が<教える人>から<共に探究する存在>になったことが大きな要因と考えられる。

■分科会討議の内容

1. 「出会い・関わり」を楽しむ造形あそび—感覚を通じた感性の芽生えを育てる—

子どもたちが身近な環境と出会い、感覚を働かせて関わっていく中で生まれる表現の始まりに着目し感性の育ちを支える造形あそびの意義をさぐる

2. 「感じ・考える」プロセスを支える保育のまなざし—主体性を育む環境と関わり—

作品の完成ではなく、表現の過程に焦点を当て、子どもたちの「感じる・考える・試みる」営みを引き出す保育者の視点と環境構成について考察する

この2つの討議の柱に沿って、5グループに分かれ①気づき②やってみたいこと③自園の課題④疑問・質問の4項目について討議。

① 気づき

- ・待つこと、保育者の声掛けや関わり方、またそのままでは終わらない“つながりのある保育”が大切ということを感じた。
- ・感覚が大事。しかし、それらを使った経験は日常にあふれている。また、造形あそびによる素材の出会いも、特別な物でもなく廃材など日常にあるもので良いということに気が付いた。
- ・ゴールを大人が決めるのではなくプロセスを大切にすることが重要。
- ・教師は“教える人”ではなく“子どもと横並びで関わっていく”ということが大事。
- ・失敗を怖がっている子は保育者が何気なく発した言葉がプレッシャーになっているのかもしれないと感じた。結果ではなく、過程に着目した言葉がけ・関わりで、子どもが伸び伸びと表現をすることができる環境作りが大切だと感じた。
- ・子どもは記憶に残らなくても体に残る。保育者は保育者同士言葉に残していくのが大切。

② 課題

- ・職員同士がどうしても同じ方向を向いて、同じ想いをもって保育をすることができるのかという点が難しい。日々の保育の準備や職員の勤務時間の違いなどにより共有する時間の確保をすることがなかなかできない。
- ・プロセスが大切だということは意識しつつも作品の完成を目指してしまう。
- ・園周辺の交通状況、気候変動など目まぐるしく変化していく環境の中での環境設定に悩んでしまう。
- ・安全と経験のバランスが難しい(Ex. 火を使う活動)。
- ・幼稚園や保育園でのつながりや学びを途切れさせないためにも、こういった活動を小学校の先生に(低学年だけでなく6年の先生にも)知ってほしい。(幼保小連携・接続)

③ やってみたいこと

- ・子どもたちをホームセンターに連れていき、買ったものでどんな遊びができるか。
- ・子どもたちが自分で選んだ場所で給食を食べる(先生の見える範囲)。
- ・センサーマットを使用し、全身の感覚を使った遊びをしていきたい。
- ・「明日何をやりたい？」と子どもが考えた活動を行う。
- ・テーマを基にした探究が面白い。行事や季節にとらわれず、テーマを設定してやってみたい。

④ 疑問・質問

- ・職員の情報共有をどのような時間、方法で行っているか。
- ・小学校とはどのように接続をしているか。
- ・“こどもかいぎ”はどのように取り組んでいるか。
- ・年度の切り替えでつながる保育が途切れてしまう。年間計画はあるが、年度をつなぐ計画もあるのか。
- ・デジタル化が進んでいる中で子どもの経験はどう担保していく？

■助言(元山梨学院短期大学教授 伊藤美輝)

- ・同じ活動でも繰り返して行うことで子どもたちは経験を積み重ねていく。センサーグッズも、活動を継続していくことで、同じ0~2歳児でもまた違った姿が見えてくるのでぜひ継続して行って欲しい。また、1歳児2歳児で紙をちぎって遊び、そのちぎった紙を3歳児が貼り絵に使うなど、造形あそびで生まれたものは次の造形あそびで使う。

- ・よく“教えていいんですか？”と聞かれるが、色々な方法や素材に出会うきっかけを教えることはして良い。「目の位置が違うでしょ」など、型にはめることをしてはいけない。
- ・デジタル化が進む中で、直接的な体験が今まで以上に重要になる。感じて考えることができるからAIに指示ができる。
- ・先生たち自身が自信をもってほしい。特に美術は「苦手」という人が多い。しかし、“苦手”と思っている人程学ぶチャンスがある。
- ・今までの実践を否定することはない。今までしてきた“お制作”の中で、一人ひとりの子どもたちがどんな風に関わっているかということをしつくり見て、完成よりもプロセスを見る。様々な材料や方法と出会うきっかけとしてお制作をすることには意味がある。今までやってきたことを少し視点を変えて見てみる。
- ・変化はゆっくり、でも着実にやってくる。一人ひとり違う変化を見守ってほしい。見守るから変わったことに気が付ける。
- ・子どもと一緒に未来を考えてみましょう。未来は誰かに作ってもらうものではなく自分で作るもの。その未来を託すのが子どもたち。子どもたちに託すためには“自分はどんな未来を作っていきたいか”ということと考えれば視点が変わってくる。
- ・先生たち自身が絵を描くこと、制作をすることを楽しんでください。

■総括助言(安藤聖子)

- ・夜間学校には海外から来た学生が多い。その学生の中には、クレヨンや粘土を見たこと触ったことがないという学生も。クレヨンや粘土が当たり前にある日本の子どもたちの文化・美術図工レベルはとても高いが、そこには先生たちの日々の努力がある。目の前にいる子どもたちが将来世界の人々とコミュニケーションをとっていく中で必要な基礎力のレベルを上げているのが先生たちなので、自信をもって欲しい。
- ・<この子たちが大人になった時の姿・将来の姿>をぜひイメージして育てて欲しい。“この子の特性は小学校では引っ掛かるかもしれない。でも中学・高校・大人になった時にノーベル賞をもらうかもしれない”という視点を常に持って欲しい。卒園が目標ではない。
- ・声掛けは、1声を掛けたら10聴くことを意識してほしい。声を掛けただけで満足してはいけない。
- ・小中高は図画工作・美術という教科だが、保育園幼稚園大学は教科ではない。全領域を横断した活動が保育園・幼稚園ではできる。その日に行った活動を5領域から見直し、視点を広げていく。掘り下げるのではなく広げる。そして余裕があったら深めて行って欲しい。



【第2分科会】

《茨城県》

記録者：住谷 浩（水戸市立内原小学校）

■提案

だんだん、くるくる、べこべこボール（3学年）
水戸市立河和田小学校
堀江 陽子

■協議の内容

1. 成果と課題

材料と場の工夫により、自由な発想で手を動かすことや体全体を使ったのびのびとした表現について改善が見られた。

児童が主体となって材料の工夫を考えられる前に、教師が先導する形になったことに課題が残った。

2. 協議から

とりあえずやってみて、そこから何が生まれるかといった、何を表すかにとらわれない造形遊び本来の目線で実践されているのがとてもよかった。

五感を使って自由に活動できる素材、環境がよかった。子どもたちの活動の過程やつぶやきを見取っていききたい。

段ボールはとても魅力的な素材。大きなシンボルツリーも魅力的で、そこに子どもたちの思いが重なれば、さらに活動の広がりが見られたように思う。

段ボールの性質や大きさによっても活動が変わってくる。導入で、「段ボールと仲良くなろう」「変身させよう」と言っていたら、また違った活動になったと思う。麻ひもなどがあればつるすなど活動が広がったかもしれない。

3. 指導助言

造形遊びでは、子どもたちの発見が生まれる産声を大事にしながら発想と導入を持ってくる。思考がどのように広がっていくのか、発想が生まれる材料やシチュエーション、仲間なども大切にしたい。今回は、あえて道具を使わずに材料を一つに絞ったことで五感を使った活動となっていた。段ボールという試行錯誤の余地のある材料から、ねじる、ちぎる、やぶる、濡らすといった様々な活動が生まれた。そこから子どもたちの対話による感動があり、豊かな発想力や創造力につながっていた。教師側がうながす前にラウンドスタディが自然に始まり、子どもたち自身でつくりつくりかえていくプロセスも大事である。評価については動画等で記録していくことが必要で、今回も評価に結びついていた。今後も造形遊びとして、子どもたちのつぶやき、可能性、過程を大切にしていきたい。

【第2分科会】

《千葉県》

記録者：毛利 麻衣子（千葉市立磯辺小学校）

■提案

題材名「見つけよう！しぜんの色」
「見つけよう！しぜんの色+色」
「お気に入りの場所をしょうかいたします」
（3学年）

千葉市立生浜東小学校

桑原 小百合

■協議の内容

1. 授業者から

(1) 成果

身近な環境を生かした題材を取り上げ、教科横断的な学習計画を工夫することで、自然の色や形等と十分にに関わり、造形活動を行えた。

(2) 課題

鑑賞方法は写真より動画の方が思いを伝えやすいが、鑑賞時間や児童の伝える力の育成も必要となる。

2. 協議内容

(1) 身近な環境を取り扱うことについて

複数回、身近な環境に関わりをもつことや、色や形へと段階をおって着目していったことがよい。発表形式については、自由にその箇所を見て回るパビリオン形式もよいのではないかと。

(2) 教科横断的な学習計画について

それぞれの教科の時数や達成すべきねらいをおさえていくとよい。

3. 指導助言

環境に恵まれた地域の特色を生かした研究であり、身近な環境に対し、造形的な視点で捉え、再発見していく実践である。身近な自然に自分なりのイメージをもち、色から形へと段階をおって引き出すことができた。

総合的な学習で地域について学び、図工の学習では造形的な視点からその地域を捉えることで、新たな意味や価値を創造することができた。その結果、図工における表現活動や鑑賞活動により深みが生まれるであろう。

タブレットPCを、作品を振り返るツール、作品を客観的にみるツール、対話的な鑑賞を行うツールとして活用していた。活動の際、その都度撮影することで、児童の試行錯誤の軌跡も残り、評価へと繋げていくこともできる。

【第2分科会】

《山梨県》

記録者：浅川 和子（南アルプス市立楡形中学校）

■提案

ここから見ると（6学年）

甲府市立甲運小学校

秋山 萌

■協議の内容

1. 授業者より（成果と課題）

図画工作における「造形遊び」は、子どもの自由な発想を促す学習内容である。しかし、高学年になるにつれ、「うまく描けない」「考えるのが難しい」などの理由から苦手意識をもつ子どもが増える傾向がある。本学級でも、特に「造形遊び」に対する興味が薄く、「何をつくれればよいか分からない」「想像するのが苦手」と感じる子どもがいた。こうした状況から、造形遊びにおいて子どもが主体的に活動できるような題材設定や指導の工夫が必要であると考えた。

「ここから見ると」という言葉は、多様な方向や場所、時間、感情の変化を受け止められる曖昧さを持ち、子どもの自由なイメージや表現の広がりを引き出すのに適している。校舎という身近な場所の奥行きやバランスに着目しながら、視点の変化による見え方の面白さを感じ取り、それを生かして造形活動を行った。活動を通して「感じる・考える・試みる」という学びのプロセスが有機的に展開し、子どもの主体的な学びと創造的な活動が生まれるように授業を構成した。

成果としては、まず子どもたちが身近な空間の中にある面白さや意外な部分に気づくことができた点である。また、ICTを利用したことで子どもたちの活動にすぐに対応でき、その時に必要な声掛けによって、子どもたちの思考の幅を広げたり、子ども同士の学びをつなげたりすることにつながった。

課題としてはICT活用や学習感想等の工夫をしたものの、子どもたちの「感じ、考え、試みる」姿を完全には見取れない部分があった。また、グループの中で役割分担したことで思考や活動内容に偏りができてしまった点がある。一人ひとりにあわせた支援の工夫が必要であることを感じた。

2. グループ討議の内容

- ・本題材は「工作」にもなりやすい側面がある。造形遊びとして行う際は、ねらいをしっかりと押さえておく必要がある。
- ・グループでの活動が多いが、個人でじっくり考える時間も大切である。
- ・タブレットPCを活用し、ビデオ通話で常に連絡を取り合う工夫は効果的だった。

- ・導入時に教師が説明をし過ぎてしまうと、子どもの発想を狭めてしまう可能性がある。学級の実態に沿った適切な説明をしていく必要がある。
- ・作品をつくることを目的とするのではなく、「遊び」の要素を大切にすることが大切である。本題材では、色々な視点を工夫しながら見え方の変化を楽しんでいる様子が見られた。

■分科会討議の内容

子どもたちは学校生活を通して日常を楽しみ、その中で社会性や課題を解決する力を身に付けている。新しいものを見たり使ったりというだけでなく、普段目にしたものの中の美しさに気付くことが心の豊かさにつながる。図画工作科でないとできない友達との関わり方がある。答えがそれぞれの中にあり、それを共有・共感することで、発見があり、世界が広がる。それは生きる喜びにもなる。教師は其中で呼びかけたり、投げかけたりしながら、子どもたちの活動を広げ、つなげていくことが大切である。

上手な絵はAIが描いてくれる。子どもたちには「発想力」「構想力」を育みたい。そのためには実体験が大切である。自分の手で実際にやってみること、全身を使って五感で感じるからこそ味わえる発見・感動がある。

■総括助言（東京家政大学教授 岡田 京子）

図画工作科では、実際にやってみることを大切にしながらICTを活用していくことが望ましい。本研究会で様々な活用例が紹介されたが、今後も新たな活用方法が出てくることを期待している。

認知のタイプや学習速度は子どもによってそれぞれである。その子なりの学び方が保障されることがこの教科では大切である。社会全体が「速さ」を重視し過ぎているのではないだろうか。「速く」学べなくても「しっかり」学べている子どもたちがいる。「その子らしい」学びを大切にしていきたい。

図画工作科の授業づくりでは、[共通事項]の理解が重要である。形や色はよく意識されているが「質感」にも着目させてほしい。教師自身も「発見・感動」しながら、美しさや面白さに気付き、子どもたちに伝えていくことが大切である。



【第3分科会】

《神奈川県》

記録者：能登 啓允（川崎市立高津小学校）

■提案

題材名 おはなし だいすき(第1学年)
言葉から想像を広げて(第6学年)

川崎市立虹ヶ丘学校

山中 紗恵

■協議の内容

1 自評

授業者は6年間での子どもたちの育ちを意識し、題材の系統を意識した題材・カリキュラム作りと、個別最適な学び、協働的な学びを充実させていくことができる授業作りの在り方について授業の反省をもとに話した。

2 研究協議

協議会は「学びの系統性を意識した題材作り」「表したいイメージが広がる授業作り」の2本をもとに進めた。

(1) 造形的な見方の広がり

味わう場所、時間の確保、友達の考えを自然と見合える環境、何ができるか技法を積み重ねていくことが大事だと思った。

(2) 題材の系統性について

カリキュラムは教科書会社をベースにしつつ、学校の様子や季節、児童の実態で各学校で調整している。系統性を意識することは絵画では難しい面があるが、技術面では系統性が出しやすい。材料と道具の関わり方が学びの系統性を広げていく手がかかりになるのではないかと。そこから自分の思いを表現する喜びに繋げていけるとよい。

(3) 絵画技法について

モダンテクニックは4年生で学ぶことが多いが、その後子どもたちが絵画に進んで生かしている場面はあまり見ない。あえて使わせるのではなく、自然と使えるようにこちらが意識して普段から使える環境を整えることが大切なかもしれない。学校によっては子どもたちにさまざまな技法を蓄積させ、いつでも使えるようにしている。当該学年だけでなく、全校で技法を使った造形遊びをするなど、子どもたちにとってより身近なものにできるとよい。道具も技法も、子どもたちがしっかり考える時間を設けることが大切だと思うが、その時間の確保が年間時数を踏まえると難しい現状がある。

【第3分科会】

《埼玉県》

記録者：吉原 彩乃（美里町立松久小学校）

■提案

題材名 夢のねんどワールド(第3学年)
神川町立丹荘小学校

坂藤 頌一

■協議の内容

1 協議

(1) (手立て2) グループづくりの提案について

協働的な学びと個別最適な学びを一体化としてとらえた時、図工における協働的な学びを授業の中でどう活用しているか。

協働的な学びを重視しすぎると、個人の思いがなくなってしまうのではないかと。

(2) 児童が意欲をもって主体的に臨むための題材の設定の仕方について

教師が良い作品を取り上げて共有することで、真似をする児童がいるが、本当に児童の思いが反映されているのか。意欲を高めるために、困っている児童の作品を取り上げるなどの関わり方の工夫が必要になるのではないかと。

2 指導助言

児童が思い描くように作れず、未完成になってしまった作品の扱い方について、完成形が評価されるのではなく、思いをもって作品作りをしていたかが大切である。教師は児童の思いを見とれる力が必要になる。

図工のグループ編成について、特に粘土は見通しをもって活動することが難しい。児童の発見によって、活動の流れが変わっていくため、発達段階を考慮しながら、高学年で見通しを持って活動できるようになれば良い。

3 成果と課題

成果：粘土体操で土粘土に触る時間を十分にとったため、どの児童も楽しんで作品製作にとりくむことができた。

課題：児童のつぶやきに気付き、的確にとらえるのが難しかった。その中で、教師の働きかけによって児童に変容が見られたことに喜びを感じた。

【第3分科会】

〈山梨県〉

記録者：青木 可奈子（甲州市立奥野田小学校）

■提案

ギコギコからワクワク

～木でお家をもっと楽しく！～（第4学年）

甲州市立塩山北小学校

市川 安紀

■協議の内容

1 授業者の反省

児童は、自分の感性・感覚を働かせていた。初めて木を切る経験を通して、木材により切る角度や切り方が変わること気付いていた。また、ゲストティーチャーの用意した木を、どこまで切れているか覗き込んだり切る音を楽しんだりしていた。堅い木を切る時はゲストティーチャーが手を貸してくれたので、体で切り方や切っている感覚を掴むことができていた。

2 協議の中で出た意見

(1) ゲストティーチャーについて

ゲストティーチャーがいたため、切る角度など専門的な技術を子供たちが見たり体感したりできたのがよかった。一方で、ゲストティーチャーが支援しすぎると、子供の発見を潰してしまうのではないかと意見も出された。

(2) 一つの作業に没頭できる時間の確保

切ることだけに没頭できる時間は貴重であり「発見と感動」というテーマに照らし合わせて、用具や材料との出会わせ方がよかった。また、達成感を得られる材料の用意がしっかりできていたこともよかった。

(3) 題材の捉え方と子供たちの発想について

教科書では「工作」だが、「立体」として導入していたので、いろいろな発想が出ていたのもよかった。しかし、実践の中で「星形をつくりたい」と考えた子供が、つくりたい意欲を絶やさないようにするために、設計図を用意することも必要ではないかという意見も出された。

■分科会討議の内容

1 教師自身が楽しむこと

子供たちがやってみて「楽しい！」と思う題材や材料を考えるには、教師自身のドキメキも大切である。教師が実際につくってみて、具体的なビジョンをもつことで、子供たちがワクワクする題材をつくることできる。教師自身がいろいろな材料を見て、どんなことができるかな？というアンテナを張ることも大事である。

2 外部講師(ゲストティーチャー)の力

専門家から話を聞く機会が「本物に触れる体験」につながる。題材のねらいを大切にすることで、表現活動に浸ることができるのではないかと。

3 教師の力

教師の見守りや、普段の学級の雰囲気づくりは重要である。題材名の工夫をすることも、子供たちの創作意欲につながる。また、今までの経験を想起させることができるような声掛けも大切になる。

■総括助言（東京学芸大学教授 西村 德行）

山梨県の提案では、「切ることを十分に味わい尽くす」という言葉の通り、「私が切った木材」になっていた。「感じる・考える・試みる」視点から考えると、「木を切る」だけでも十分授業として成り立つ。教師として教えることと子供たちに委ねることをゲストティーチャーと共有することも大切である。

埼玉県提案では、技法に名前を付けるなど、まさに教師が楽しんでいることが感じられた。思い通りにできなかった子供の思いをどう汲んでいくかを考えることができるのが、教師の専門性である。3年生は見通しをもつことより「思い付き・即興で学ぶ」特性があるので、授業中に様々な発見ができるようにすることも大切である。

めあては、題材によって、どのタイミングでどんな言葉で伝えるか考える必要がある。また、振り返りも、ワークシートなどに書いたり遊んでみたりするなどの様々な活動が考えられる。子供が絵を「描きたい」と思う提示の仕方や題材の選び方を、教師と子供との間でカスタマイズしていくことが大切である。そして、それを教師同士で共有したり、次学年への引き継ぎをICT等の活用で行ったりすることで、組織の取組となり蓄積されていく。神奈川県提案では、鑑賞時にペープサートを使っており、友人と自分の作品の共通項を見出す経験につながる大切な活動であった。

どの子供も輝く授業をすることと教師がいかに関心しているかが最も重要である。働き方改革によって研究する時間が削られているが、このような研究を共有できる場（大会）を設けることは続けていきたい。



【第4分科会】

《静岡県》

記録者：黒田 有美（岡部小学校）

■提案

題材名：「心をつなぐ 竹あかり」（4年）

藤枝市立朝比奈第一小学校

柳内 志穂

■協議の内容

授業では、単元の前半で竹あかりの製作を行い、後半で様々な場所において鑑賞活動を行った。本実践では、竹という地域の材を取り上げた。教材研究の過程を経て、竹の魅力子どもたちへ伝えたいという教師の思いが大きくなっていった。

自然や文化に恵まれた小規模校であるため、地域の魅力を取り入れた年間計画を作成し、積極的に同じ中学校区の小学校と交流する機会を設けていた。また、授業の中で子どもが使用したい道具を欲したときに、使うことができるよう、よりよい環境づくりと教材研究を熱心に行っていた。子どもの思いに寄り添い「吊り下げたい」と考えた子どもに、バナナホルダーを用意するなど、教師の子どもへの愛情を感じることができる実践であった。

鑑賞の年間計画において、地域での展示や、音楽会でのコラボレーション、交流学校での作品紹介など、計画的に鑑賞が行われたことの成果があった。製作途中に相互鑑賞の時間を確保したが、そこに至るまでに、子どもたち同士で自然に鑑賞ができていたため、鑑賞の時間を省くなど、子どもの表れに沿って柔軟に授業を進めていきたい。

分科会討議では、カリキュラムマネジメントが素晴らしいという意見があった。例えば、カプラ積み木からキャップを使った造形遊びの活動を大切にすることで、本単元が充実したものとなった。また、同じ中学校区の小学校との交流の時に、自分の作品を紹介したことにも価値があった。さらに、地域の施設等へ展示することも、子どもの意欲につながる取り組みであった。今回は、教師が展示する場所を決定していたが、子どもたち自身が自分の作品をどこに展示したいのか決めることも良かったのではないかと意見が出された。展示した場所で、地域の人からアンケートなど評価をもらう場を設定すれば、子どもの自己肯定感がより高まったのではないかと感じた。

小規模校での図画工作科の指導、地域教材の活用、鑑賞の場についてなど、話題は多岐にわたり、大変有意義な分科会となった。

【第4分科会】

《長野県》

記録者：青木 香織（長野市立裾花中学校）

■提案

題材名：（3年）

味わおう！伝え合おう！私の好きな色・かたち

岡谷市立川岸小学校

久田 ひかり

■協議の内容

1 実践報告・指導者助言

本発表は本来、久田教諭が行う予定であったが、体調不良のため急遽欠席となり、研究に継続的に関わってきた南部小学校校長の柄澤教諭が代理で報告を行った。配付資料には授業記録や実践レポートがまとめられており、特に「色や形を言語化することが苦手な子どもをどのように見取り、評価するか」という課題について、参加者に助言を求めることが本発表の目的とされた。

実践は、昨年度の長野県美術教育研究大会南信ブロック大会で公開された、岡谷市立川岸小学校3年生の鑑賞授業である。諏訪地区は美術館や博物館が多く、10年以上前から美術館と連携した鑑賞教育に力を入れてきた地域である。授業者の久田先生は美術免許を持つ教職4年目の教師で、1年目には武蔵野美術大学の学生による体感型鑑賞「旅するムサビ」を導入し、子どもたちの豊かな対話に鑑賞教育の可能性を実感した。その後も美術館鑑賞やアートカードの活用などを日常的に継続してきた。

今回の授業では、絵の具による実験的な表現活動を経て、子どもたちが自作した色・形カードを用いたゲーム形式の鑑賞を実施した。班ごとにテーマに合うカードを選び、理由や根拠を話し合うことで、色や形、その組み合わせが与える印象に気づくことをねらいとした。リーダー役の児童が質問カードを使って問い返すことで、自然な言語活動が促され、対話が深まっていった。

2 成果課題

具体物への見立てから物語や動きを想像し、「楽しい」「悲しい」「ガーン」といった感情語やオノマトペと結びつけて鑑賞する活動を通して、同じ作品でも感じ方が多様であることを子どもたちは実感した。友達の見方と自分の見方を比べながら、互いの感じ方の良さに気づく姿が多く見られ、主体的で協働的な学びが成立していた。成果とともに、言語化が難しい子どもへの支援と評価の在り方が今後の課題として示され、討議へとつながった。

【第4分科会】

《山梨県》

記録者：井澤 映里子（甲運小学校）

■提案

題材名「でこぼこ はっけん！」（1年生）

山梨大学教育学部附属小学校

加賀美 信行

■協議の内容

本提案の中で、身の回りのものの凹凸の面白さを実際に「触ること」で楽しく発見する児童の様子や、写し取った形を媒介に子ども同士が豊かに交流し、それぞれの児童がイメージをいっそう膨らませながらその感動をお互いに共有する児童の姿が多く見られた。

今回の協議では、鑑賞題材の見取りについて話し合われた。着目する鑑賞の視点としてどういった力をねらっているのか、また、子どもたちのどんな姿があればいいのかを教師側でしっかりと持っていることが大切であるということである。学習の中で子どもたちから自然と対話が始まり、グループでは子ども自身がファシリテーターをしていた。自分で感じたものを言葉で表すこと、さらに友達を感じたことを言葉で受け取ること、そして同じものを違った感じ方やその子なりの言葉で対話していくことで感じ方の深まりが感じられるため、言語化することの大切さが改めて出された。隙間の中に入って凹凸を見つける姿、友達のところへ行ってお互いに形を見合う姿、夢中になり粘土に形を取り続ける姿、フロッタージュを作り続ける姿と子どもたちの様々に学びを深める姿が見られた。全体での活動、グループでの活動、個の活動など意図的な活動があったため、子どもたちは様々なつぶやきや対話が見られた。とかくインプットを先行してしまうがアウトプットが大事であり、今回のように子ども同士をつなぐそのような場を設定していくことで、子どもたちのコミュニケーションの広がりにつながったのではないかと協議が行われた。また、教師も見取りの準備が必要であり、子どもたちが発する言葉だけでなく、指の動かし方や、姿勢、体の位置、いろいろな方向から見ている見方など、体の動きからも子どもたちの活動を見取ることができる。実際に触り合ったり、子ども自らの五感を使ったり、活動しやすいような箱が準備されたりと何を大事に学習をしていくかをこちらが捉えておくことで子どもたちの豊かな学びを評価につなげていくことができると考える。また図工という枠を取って、授業を続けるとしたらどんな展開にするのかなど、生活に戻す、また他教科につなげていくなどつながりをもった学習にしていくこともいいというお話をいただいた。

■分科会討議の内容

鑑賞とは思いを広げ、自分を豊かにするものである。鑑賞の学習のあり方を「子どもを見る」ではなく、「子どもから見る」ことの大切さから討議を行った。鑑賞とは子どもも教師も誰もが対等にできる活動であり、問いをもち続けながら活動する子どもたちに踏み込んでいき、安心感をもって感じ方を認め合える場を設定していきながら、土台や新しい考え方をつくっていくものである。他教科や人、教材、作品と子ども自身がつながっていき、その積み重ねにより子どもたちが豊かになっていく。他者がいないと自分を知ることができず、また自分の良さがわからない。視野を広げて自分を見つめることができる。ただ、教師視点では題材や今までの積み重ねなどどういう過程があったのかを見ていくことが大切である。作って終わり、飾って終わりではなく、それがきっかけになるかもしれないしさらに変わるかもしれない。図工の枠だけではなく、エンドレスに続いていくものである。だから子どもたちの未来がずっとあるという中でどういう授業をつくっていくのが大切であるという討議がなされた。

■総括助言（元日本体育大学教授 奥村 高明）

子どもたちは対話と協働を通して新しい見方と考え方を獲得している。場と文脈を変えると子どもたちの概念地図はどんどん広がっていく。学校の教育課程全体の中での図工として進めていくことが必要である。他者とつながり、認めてもらい誰かのひらめきとなる楽しさを奥村先生の提示されたラウンド川柳から味わうことができた。様々な文脈があって名画となっていく。自分自身を見たり世界を見たりすることが鑑賞である。自己調整力は活動中にある。子どもたちの絵も子どもたちの顔を見て教師自身が言葉をかえしていく。対話のみではなく、対話の中から生まれたことが大切であり、それが対話型鑑賞となっていく。



【第5分科会】

《東京都》

記録者：橘川 小夜（中野区立中野東中学校）

■提案

題材名「心みつめて～私らしい自画像～」（3学年）

国分寺市立第一中学校

小林 奈央

■協議の内容

1 協議会の内容

協議の柱「美術の授業における個別最適な学び」

- ・美術においては、自分で主題を選んでいる時点で、個別最適といえる。自己決定するタイミングを増やすことで、自分の見方や考え方が深まっていくと思う。
- ・多様な材料の準備がされており、生徒が必要とするものがすぐに手に取ることができる、生徒自身が選べる教室環境の整備ができていた。使用する材料ごとにグループ分けするなどの工夫の仕方もあるのではないかと。
- ・生徒が自由な材料でできるので、カオスになる危険性もある中、生徒との関係性ができているから、成立する授業である。それができる先生と生徒が素晴らしい。すべてを教師が準備するのではなく、生徒が必要と感じたときに、自発的に準備させることも必要ではないか。生徒に委ねることと、教師が束ねるところがポイントであった。
- ・1、2年生での材料の体験を増やすことの大切さを実感した授業であった。3年間を見通した計画の大切である。
- ・手描きとデジタルの両方を活用してアイデアを広げている。賛否あると思うが、AIを活用した発想のサポートも話題になった。個別最適な学びを通して、思考力や判断力を働かせていた。

2 指導・講評（松永かおり校長先生）

自画像の見取りをする時に、一人一人の子どもを大切に指導している姿が印象的であった。昭和の自画像は、鉛筆一本で写実的に描く、画一的な授業で、上手い、下手、が一目瞭然であった。時代に応じた、個別最適な学びの授業にしていくには、キーワードが2つある。「学びの個性化」は、自分の興味に基づいて学習を深め、アウトプットの方法も生徒が選ぶ。「指導の個別化」は、生徒一人一人に合わせて、指導方法や教材、時間を柔軟に調整することである。主題を考えているから個別最適化とは言えない。子どもの自己決定する場面を増やす、そのための環境設定が必要である。また、指導と評価の一体化をすすめる、何をもって評価するのかを指導者が明確化すること。授業者は、作品だけでなく、あらゆる手段を使って、制作の過程を評価していた。

【第5分科会】

《新潟県》

記録者：長沢 直行（新潟市立小新中学校）

■提案

題材名「インスタレーション

～空間を変容させる造形のダイナミズム～」（中2）

新潟大学附属新潟中学校

丸山 広大

■協議の内容

1 協議の概要

「美術の授業におけるコミュニティ」と「コミュニティがあるからこそ生まれる感動」の二つを柱に、題材と実践の意味が多面的に検討された。段ボールを用いたインスタレーションは、安価で大量に扱え、端を切っただけで動的な形が立ち上がるという特性から、一人では届かないスケールや多様な発想を引き出す素材として位置付けられた。同時に、相互鑑賞や作品を並べて共有する活動、三十人がそれぞれ制作に没頭する美術室の空気など、日常の授業にもすでに美術コミュニティが立ち現れているとの指摘があった。そして、制作の途中で互いの作品を見に行く、つぶやきを交わすといった自然発生的な関わりを、教師が言葉や鑑賞の場につなぎ直すことによって、「一緒に作っている仲間」「ここでなら表現してよい」という感覚が育つことも共有された。また、グループで得た広がりや、最終的には個人の学びとして評価せざるを得ないことから、プログレスカードや振り返り記述を通して、一人一人の美術観の変容や対話のレポーターを丁寧に見取る必要性が確認された。さらに、参加者からは、評価規準や指導案を共有し、自校での応用を検討したいとの要望も出され、題材の工夫にとどまらず、カリキュラムの設計の中でコミュニティをどう位置付けるかが問われた。

2 成果と課題

成果として、インスタレーションという手法と大規模な協同制作を通して、自他の感性を開き、美術表現への価値観を揺さぶる題材になっていることが明らかになった。発言や記述、プログレスカードなどから、友だちとの対話を手がかりに自分の感じ方を言語化し、美術のイメージを拡張していこうとする姿が見取れる。

一方で、協同制作の場が特定の生徒の意見に偏ったり、静かな生徒の学びが見えにくくなったりする危険性も指摘され、望ましいコミュニティの姿に向けて教師がどのように介入し、集団での経験を一人一人の学びの深まりとして評価していくかが、今後の課題として示された。コミュニティという言葉だけが一人歩きしないように、目指す生徒の姿と授業の手立て、評価の在り方をつなぎ直しながら確かめていく視点が、これからの造形の学びを考える上で大切になることが示唆された。

【第5分科会】

《山梨県》

記録者：廣瀬 美雨（明見中学校）

■提案

題材名「すごポップアップをつくらう」（1年）

大月市立大月東中学校

百瀬 淳一

■協議の内容

授業者の反省について、導入で教師が作成した参考作品の提示をすることで生徒の興味を引き出すことができた。展開で主題設定の場面をどこで設けたのか質問があった。ポップアップの立ち上がらせ方について試行錯誤をする時間を十分に確保する必要があったため、子どもが主題を考える場面を設けることができなかった。自己表現よりデザインの領域で、誰かに思いを伝えることを題材にポップアップカードを制作することで主題が掴みやすかったのではないかという意見があった。

立ち上がらせることが難しい生徒への声掛けや手立てについては、「立ち歩きタイム」を通して生徒同士が関わり、試行錯誤し相互鑑賞する場を設けることで自分の改善策に気づき修正を重ね、立ち上がらせることにつながった。活動の終わりには実物投影機で相互鑑賞する時間を設け、ポップアップを開いたり閉じたりする際の動きにフォーカスをおいて鑑賞をした。

協議では、「子どもたちがキラめく姿を生み出す手立て」について、まずキラめく姿はどのような姿か検討した。キラめく姿とは、発見や驚きと出会えた時や失敗を恐れずチャレンジする姿勢、自分にもできそう、やってみたいと思う姿などが挙げられた。

授業実践の中では、教師が制作した参考作品を提示した際「凄い、作ってみたい」という生徒の声があったり、失敗しても生徒同士でアドバイスをすることで課題解決につながったりなど、生徒がキラめく瞬間が多くあった。

また、毎時間の考察や制作を写真とコメントを用いて記録することでより効果的な振り返りにつながるといった意見が出た。活動では用紙を一枚だけでなく何枚か貼り合わせて表現するなど表現の広がりをもたせるとより充実した活動につながる。使う用具やポップアップの仕組みなど基礎基本を定着させたのちに自由な活動が必要。などの意見が出された。

まとめの時間には実物投影機での相互鑑賞だけでなく、クラウドに入れて後々見返したり作品として掲示したりすることができるという。そして学年が上がった際に1年生のときにこのような体験をしたなど思い出し、次の表現に生かせるような工夫が必要だと意見があった。

■分科会討議の内容

「自分らしさを表現するための手立てとは」について協議、検討を行った。まず、自分らしさが出せる題材設定の工夫が必要。自分らしさが出せる題材とは自分の生活の中で身近なものから考えられる題材である。加えて子どもの興味を引き出す題材名の工夫も必要である。やらされるのではなく、自分が主体的に活動できる授業内容の設定が必要。技法や用具などを自分で選択し、決定できるよう教材の選択肢を増やすことも自分らしさを表現するための手立てにつながる。

理想の自分と現実の自分のギャップもある中で、自分らしさを見つけることは難しいが、良い部分以外も受け入れ、作品を成果物として持ち帰ることが大切。

自分が納得できる作品ができたときに自分らしさが出てくる。社会性がある生徒ほど自分らしさを引き出すことが難しいことがある。

A表現の領域はすべて自画像的な表現につながってくる。自分の内面にどれだけ迫っていけるか。孤独になる時間、個人で考える時間が必要。マインドマップのワークシートによって自分自身をよく見つめて主題を深めることで自分らしさを見つけていくことができる。教師が普段から生徒へ声掛けをすることで生徒一人一人が安心して自分らしさを発揮しながら活動できる環境をつくるのが大切。3年間を見通した学習内容の選択によって自分らしさを引き出すような授業の組み立てが必要。

■総括助言（山梨大学教授 新野 貴則）

主題を持つことの意味について、主題は学びを形作る原動力がある。学びとは自分自身で問いをもって表現を試み、意味や価値の創造を作り上げることである。問いが主題になるため、主題が無ければ活動あって学び無しになってしまう。自分らしさとは表現していくうちに作り出されるもの。自分が変容したときに自己を実感する。他者とのコミュニティができるためには、ツールが必要。感覚や感性が大切である。



【第6分科会】

《群馬県》

記録者：多胡慎平（群馬大学共同教育学部附属中学校）

■提案

謎だらけの鳥獣戯画～どう観る？どう考える？～
（中学2年）

太田市立尾島中学校

藤島 奈未

■協議の内容

1 授業者から

得た学びとしては、今までの鑑賞の授業は「感じたことを生徒が発表していく」といった生徒の感性に委ねるような授業が多かったと感じていたが、今回の実践を経て生徒の知識が合わさり、より具体的な見方・感じ方・考え方ができていた。「どこまでの知識を与えるべきか」ということを今後も考え、授業実践に取り組んでいきたい。

2 協議内容

実物に近い素材の用意が素晴らしく、現代の漫画との比較によって生徒に伝わりやすい導入になったと考えられる。巻物があることで体感を伴いながら当時の人々の娯楽を体感することもできていた。物語や台詞を考えさせるという授業も面白そうである。その後の水墨画の授業につなげるために、線の強弱や炭の濃淡について触れるのもよいだろう。

3 成果と課題

成果としては、ミニチュアの巻物を準備したことで、生徒一人一人がしっかり作品の世界に入ることができた。また、作品の知識を習得する時間を作ったことで作品への理解や驚きにつながり、知識を得たことで新たな考えがより具体的になっていた。課題としては、作品に関する知識をどのタイミングでどの程度示すかによって、生徒の考えが広がらなかったり、発見が少なくなったりする場合があるため、考えていく必要がある。

4 指導助言

ゲルニカの実物大での拡大表示や鳥獣戯画の巻物の作成など、本物に近いものに触れることで、子どもたちの心へ残りやすいものになっている。巻物を右から左へと見るという動きも、知識で知っていたとしても実際のその形で見ることによって改めて実感するものもあるだろう。また、漫画という生徒にとって身近なもの結びつけることのよさもある。生徒が夢中になって取り組むことができることの大切さの分かる授業だった。

【第6分科会】

《栃木県》

記録者：大野 裕美（宇都宮市立陽南中学校）

■提案

・『映える（ばえる）』って何？
～写真表現の工夫を探る～
・なんでそんなデザイン？—仮面が映す世界の文化—
宇都宮市立若松原中学校
木下 大輝

■協議の内容

協議の柱① 「アートカードの活用」

- （1）アートカードの活用について
 - ・美術館で作ったアートカードの活用。
 - ・ピカソの作品を時代ごとに並べる。
 - ・様々な題材の中で入り口として興味を示してもらうような使い方。
 - ・どんな力を身につけさせたいのか考え指定していく必要がある。
- （2）鑑賞活動をより充実させるための手立て
 - ・写真の授業では、インスタグラムに投稿するような体験を学校内で行ってみる。

協議の柱② 表現と鑑賞の相互の関連

- ・作品制作への意欲を向上させ真似したいと思わせる。その後自分のオリジナルにするためにどうするのか考えさせるやり方をしている。

その他（質問内容や協議の柱以外について）

- ・色に着目させる際に、色覚異常がある生徒への配慮について。色盲の生徒への配慮で重要なのは、明度を配慮するだけ。その子の今まで経験してきた色で表現させる。
- ・写真は技法ではないので、写真のどんな部分に視点を当てるのかが重要。
- ・「映える」という言葉は、切り口としては、有効だが、なぜ映えるのかを考え言葉で表してほしい。
- ・何も思っていなかったものも新たな視点で見える。鑑賞した後の生徒の世界が明らかに変わるのではないか。
- ・これからの未来を考えていくことは人生の舵をきり未来を拓く原動力になる。

【第6分科会】

《山梨県》

記録者：輿石貴代美（韮崎北東小学校）

■提案

題材名「ピカソはなぜ、」（中3）

韮崎市立韮崎東中学校

秋山 菜穂

■協議の内容

協議の柱

【鑑賞で味わってほしい 真の発見・真の感動とは】

① 「真の発見」とは

- ・作品の見え方そのものが変わるような気付き
- ・自分で立てた問いから、作品にじっくり向き合ったり、仲間と意見を交わしたりしながら、自分の中で意味を明らかにしていく気付き
- ⇒「表面的な発見」：教師から与えられた情報を「へえ」と受け取るだけで、作品の本質に迫る実感が伴わないもの

② 「真の感動」とは

- ・できるだけ本物に近い形で作品を味わい、身体感覚を働かせながら鑑賞することで生まれる深い心の動き
- ・作品との出会いを通して、世界の見え方そのものが新しくなるような体験
- ⇒「表面的な感動」：視覚情報だけに依存して、「きれい」や「上手」だけで終わるもの

③ 本実践にける発見や感動を生み出す工夫

本実践では、まず『ゲルニカ』を原寸大で体育館のスクリーンに投影し、生徒が作品の大きさや迫力を体全体で感じることができるようにした。こうした本物に近い出会いの方が感動を生み、作品を深く理解しようとする意欲へとつながった。

また、感動から生まれた疑問を基に、生徒同士が自由に意見交換できる時間を本時の中心に据えた。他者の視点に触れることで、自分では気付かなかった見方を発見し、その気付きが再び感動へとつながるといふ、好循環が生まれた。

導入では、生徒自身を芸術家になぞらえ、「もし自分の故郷が爆撃されたとしたら、どのような作品を描くか」を想像させた上で『ゲルニカ』と出会させた。自分の想像とピカソの表現の違いに気付くことで、「なぜこの表現なのか」という本質的な問いを自然に生み出すことができた。

さらに、『ゲルニカ』が社会科でも扱われる作品であることを踏まえつつ、美術科では造形的な見方・考え方を働かせながら、作品を味わうことを重視した。

■分科会討議の内容

討議の柱

【未来をひらく鑑賞の力～ここ山梨で本質に迫る～】

①鑑賞の本質とは何か

鑑賞の本質は、まず「好き」「嫌い」といった自分が抱いた率直な印象から出発し、作品と主体的に向き合う中で、自分の見方や感じ方を広げたり深めたりして自分の世界を更新していくことにある。作者の意図や仲間の感じ方に触れることで、多様な視点との出会いが新たな気付きとなり、より深い鑑賞へとつながる。美術は一人一人の異なる見方や感じ方を大切にする教科であり、その違いを認め合いながら、自分の感性を磨き、自分の言葉で感じたことを語っていくことが重要である。

②鑑賞は未来にどうつながるのか

作品を丁寧に鑑賞し、他者と意見を交わしながら本質を見いだしていく活動は、新たな出会いを通して自分の見方を更新していく力を育てる。鑑賞で見たり、触れたりして実感した経験と、他教科による学習が往還することで、自己の考えは変容し、物事を柔軟に捉え直す力へとつながる。また、実物作品や資料館、公共の芸術に触れる体験は、作品をより深く理解する機会となり、未来に向けて思考を広げていく鑑賞の学びを形づくる。

■総括助言（武蔵野美術大学 三澤 一実）

鑑賞は作品との出会いから始まる。まず自分が惹かれた部分を手掛かりに学びを起こし、そこから自分なりの見方や感じ方を深めていくことが重要である。鑑賞の広がりには、他者との共有が不可欠であり、多様な見方や感じ方に触れ合う場を意図的に設けたい。知識も感覚も一人一人異なるが、違いの中に通底する共通性があるからこそ共感が生まれる。鑑賞の授業は、この違いと共通性を交わす場であるため、現代の教師には、対話で見方を深めるファシリテーションが求められる。

今後も作品自体のもつ力と生徒の探究心を信じ、真の発見と真の感動のある授業を丁寧に構築し続けてほしい。



【第7分科会】

《山梨県》

記録者：風間功仁子（白根高校）

■提案

様々な文脈において必要とされる表現がなぜ生まれるのか

山梨県立甲府西高等学校

天野 圭

■協議の内容

IB（国際バカロレア）で最も重要な要素は TOK（THEORY OF KNOWLEDGE）の批判的思考である。VISUAL ARTS の学びでも、比較研究、プロセスポートフォリオ、作品発表の3分野において、批判的思考を活用した授業が展開されている。また、IB では、本物の作品を観ることを推奨しており、甲府西高でも山梨県立美術館と連携し、実物と向き合う鑑賞体験を推進している。

「ロゴマークのデザインについて考える」の美術 I の授業実践は、IB の批判的思考の要素を取り入れ、様々な「文脈」からデザインの変遷を考察し、根拠をもって自分の意見を組み立てることを目的とした内容であった。

発表後は、提案についての成果、課題、改善点についてグループ討議が行われ、以下のような意見が挙げられた。

「美術の技術だけでなく、コンセプト、個人の興味関心に着目して、それに沿って深めようとしている。」「子供たちのパーソナルな部分を押し上げ、世界に通用する力を育成する内容である。作品制作もねらいをもってまとめられ、アイデアスケッチから完成までの過程が可視化できる。」「直感だけでなく、文脈や、分析的に思考する力が育成される。」「レベルの高い内容だが時間をかければ中学校などでも実践できる。」「IB の求めるものは良い内容だが制約も多い。それらの制約を取り除けば、表現の部分には活用可能である。」「IB の実践はレベルが高く、特別で、取り入れるのは困難だが、子供たちの理想像でもある。今後の日本の子供たちには必要になる力ではないか。」、そのような意見も多く見られた。その他、「技術面を鍛える指導はどのようにしているのか。」「検索ワードによって内容に違いがある。資料の迫り方の指導はしているのか。」などの質問も出た。

■分科会討議の内容

第7分科会では、「感じ方を深める授業について」をテーマにグループ討議が行われた。

1. 「感じ、考え、試みる（この実践では文章によるアウトプット）ことが、この実践を通して感じ方を深めることにつながっていったのか」

「実物の作品を観て感じ、批判的思考で根拠をも

って考え、文章でアウトプットを試みる一連の流れが、感じ方を深める要素であり、言葉を大切にすることが思考と作品の充実につながる。」

2. 「感じ方を深める要素はなにか、この実践を活かすとしたらどのような場面か」

「他教科との横断的授業で、物事を多角的に見る力が養われる。」「美術単体でなく、生活、地域、社会と結び付ける。」「自分のルーツとリンクできる題材を活用したい。」

3. 「感じ方を深める授業を通して育まれた力は将来どのような力となりうるのか」

「自ら学ぼうとする力、課題を見付け解決する力。」「様々な発信ができる力。（表現力を磨く）」「テーマに迫ることを通して自分自身と向き合い、探究する力。」「日常の事象に目を向け、疑問をもつ。問題意識をもつことができる。」「自分のルーツとリンクし、自分の国や地域などパーソナルな部分を押し上げていくことが世界に通用する力となる。」育まれた力で、山梨をハブにしてほしい、活性化してほしいという意見もあった。

■総括助言（千葉大学准教授 神野真吾）

鑑賞教育における「文脈」というテーマで総括助言が行われた。パッケージデザインの鑑賞を例に挙げ、「経済的文脈」「機能的文脈」「社会制度的文脈」などパッケージデザインが複数の文脈の交差点であることや、文脈が色と形と紐づいて意味や価値をつくっていくことが紹介され、「感じ方を深める」ためには、色、形、主題だけでなく、更なる文脈（知識）が必要であると感じた。

文脈を用いれば鑑賞活動がより探究的な活動となること、より広い世界と関連付けながらの学びは、多角的な視野を獲得するだけでなく、美術鑑賞を通して問題意識をもったり、新たな問題に立ち向かう力を獲得したりできることが確認された。この大会のテーマである「未来をひらく原動力＝アートの力」を実感する内容であった。

